

女子バレーボール選手における人格特性とメンタルヘルスの関係 —エゴグラムとポジションに着目して¹⁾—

大久保 純一郎・永野 希美子

問題

スポーツ心理学領域において、人格とスポーツに関する研究は100年以上にわたって続けられてきた(LeUnes & Nation, 2002)。これまでの研究では主に、1)アスリートの性格特徴、2)アスリートとしての心理学的適性、あるいは3)種目選択と性格特徴に関する研究が行われてきた(Jarvis, 1999)。最近では、アスリートのメンタル・トレーニングへの関心が高まり、4)メンタルトレーニングとアスリートの性格に関する研究が、進められている。さらに、5)アスリートのメンタルヘルスと性格の関係も重要な研究テーマである。

アスリートの性格特徴に関する研究で共通に見いだされた結果は、アスリートは一般人に比較し、“外向的、活動的、攻撃的であり、劣等感や抑うつ性が少ない”というものであった(杉原, 1988)。このような性格特徴は、スポーツ経験によって形成されたとする立場もあったが、実験的、縦断的な研究からは、そのような考えは支持されなかった(杉原, 1988)。

他方、アスリートの性格特徴を、スポーツへの心理的適性の一つとしてみる研究がなされている。初期の分析では、“優れたスポーツ選手の特徴として、外向性、協調性、支配性”などが示されてきた(磯貝, 2008)。さらに、アスリート一般としての心理的適性のみならず、個別の競技や、ポジションに対する心理的適性が研究されている。さまざまな競技やポジションの心理的適性は、種目選択や興味と人格に関する研究とも関連し、数多くの研究がなされてきた。例えば、バレーボールについては、遠藤ら(e.g. 篠村・遠藤, 1989)の研究グループをはじめとして、数多くの研究が継続的に行われてきた。優れたバレーボール選手の心理学的特徴として、意欲や統制力が強く、競技不安が強くない傾向がみられた(丸山・遠藤・朽堀・福原・都沢・上田・吉田・池上, 1986)。さらに、西村・田中(1987)は、外向性の高さもあげている。また、西村・田中(1986)は、高校生選手に対して、いくつかの心理検査を行い、ポジション別の特徴についてまとめている。外向性に関しては、セッターが高く、それ以外の選手は普通のレベルであった。意欲面では、男子セッターは闘志、知的興味が高く、レフトは闘志は

低く、ライトは闘志が低く、知的興味が高いという傾向が見られた。さらに、女子のセンター、レフトで競技不安が高い傾向がある(西村・田中, 1986)。

メンタル・トレーニングは、“スポーツ選手の競技力向上ならびに実力発揮を目的とした心理スキルの教育・指導である”と定義づけられる(中込・伊藤・山本, 2007)。さらに、競技成績やプレーのできばえに直接関与する要因を検討すると、“競技レベルが高くなればなるほど心理的要因に比重がかかってくる”と言われている(遠藤, 1997)。メンタル・トレーニングは、これらの心理的要因の変容に用いられるのだが、そのトレーニングのプランニングや効果の測定にアスリートの性格特徴などのアセスメントが必要となる。

さらに、近年では、アスリート自身のメンタルヘルスが重要な課題となってきた。心理的要因が競技成績に影響をおよぼすのと同様、アスリートは選手生活や競技成績などによって心理的問題に陥ることがある。“スポーツ選手は競技力が高くなればなるほど厳しい競争環境に置かれ・・・一流選手はそのような競争環境に適応することが求められる(阿江, 2008)。”このような競争環境はストレスとなり、競争環境への適応に失敗した場合、さまざまな心理的な問題に発展する可能性がある。そこで、アスリートにおいても心理的不健康の予防や支援が必要であり、そのために、性格特徴や心身の健康に関するアセスメントが必要になる。

アスリートの性格や心理的適性に関する研究では、性格特徴のアセスメントとして、一般的な人格検査であるMoudsley Personality Inventory (MPI) 日本語版や、Y-G性格検査などが用いられてきた。これらの心理検査により、優れたアスリートの性格特徴がわかったとしても、それが気質的なものであったり、変容の困難な特性である場合、優れたアスリートの発掘(早期発見)に役立つことはあっても、平凡な選手の技能を高めるための直接的な指針にはなりがたい。Y-G性格検査やMPIで得られた性格特徴は必ずしも容易に変容できるものではない。他方、カウンセリングなどの心理臨床場面では、より変容しやすい性格特徴としてエゴグラムがよく用いられている。エゴグ

ラムパターンは、性格そのものと言うより、“行動傾向”と呼ぶべきものであり、より変容可能な特性であるとともに、対人関係や心身の健康と関係することが知られている(芦原, 1992)。優れたアスリートのエゴグラムを参考にすることで、メンタル・トレーニングの目標ともなり、個々のアスリートの性格にあった練習法の選択にも役立つ、さらに、不適応反応や心身の不健康の予防にも役立つのではないかと考えられた。

そこで、本研究では、高校生と大学生の女子バレーボール選手の性格特徴をエゴグラムによって測定し、1)各ポジションや優秀な選手の特徴について検討する。さらに、ストレス反応やストレスに関連するとされる自尊感情を測定することによって、2)競技、ポジションと、性格、心身の健康度などの相互関連性について検討する。特に、ポジションやレギュラー選手・リザーブ(控え)選手などの相違について検討することを目的として調査をおこなった。

各ポジションに特徴的な性格特徴について、吉川(2013)の記述や、大学バレーボール部のコーチを行っている第2著者の経験から、次のような予測を行った。レフトは、責任感が強く負けず嫌いかもしれない。多少自己中心的であるかもしれない。FCが高いと予測された。センターは、目の前のことに一生懸命になれる性格。客観的にものごとをみる能力が要求される。Aが高いと予測された。ライトは、情報処理や気持ちの切り替えが求められる。協調性が求められる。NP,A,ACが高いと予測された。セッターは、冷静な判断が求められる。社交性の高い性格かもしれない。Aがたかいと予測された。リベロは自分よりも人を優先する性格が多いのではないかと。心の強さが必要。NP, ACが高いと予測された。

方法

調査対象者

高校1年生から大学4回生の女子バレーボール部に所属する生徒、学生119名を対象とした(Table1)。大学生は関西3部リーグに所属し、高校生は、選抜されて大学での練習に参加してのものであり、競技レベルは比較的高い選手達であるといえる。

Table1 対象者の学年と立場

	学年							
	高校 1年	高校 2年	高校 3年	大学 1年	大学 2年	大学 3年	大学 4年	計
レギュラー	6	18	15	4	5	9	4	61
非レギュラー	23	20	4	4	3	3	1	58
合計	29	38	19	8	8	12	5	119

実質問紙および尺度

質問紙は、次の4部分から構成された。

1)人口統計学的データと満足度:フェイスシートにおいて、学年、年齢、性別、ポジション、今現在レギュラーであるか否かについて記入してもらった。ポジションはTable2に示した5種類の中から選んでもらった。

また、今現在の個人の現在の立場に対する満足度を知るために、10点満点で自己評価を求めた。

2)エゴグラム:エゴグラムの日本語版のひとつで、桂戴作が作成したものを改訂、標準化した自己成長エゴグラム(Self Grow-up Egoagram:SGE)を用いた(鈴木ら, 1997)。本検査は50項目からなり、3件法で回答を求めた。結果として、5つの自我状態、つまり批判的な親(CP)、養護的な親(NP)、大人(A)、自由な子ども(FC)、ならびに順応した子ども(AC)の強さを示す得点が測定される。

3)自尊感情:自尊感情を測定するために、Rosenberg(1965)の自尊感情尺度日本語版(山本・松井・山成, 1982)を用いた。本尺度は10項目よりなる5件法の質問紙である。

4)心身の健康度:心身の健康状態を測定するために、日本版GHQ精神健康調査票12項目短縮版(General Health Questionnaire, GHQ12:新納, 2001)を用いた。GHQ12は、日本版GHQ精神健康調査票(中川・大坊, 1985)を改訂し、12項目に短縮したものである。採点は、0-0-1-1点法を用いた。評定基準として統一されたものではないが、本田・柴田・中根(2001)は4点以上で精神健康状態に問題を持つ可能性があるとして述べている。

手続き

各高校、大学のバレーボール部に配布し、集団で記入をもとめ、回収した。

Table2 各ポジションの説明

ポジション	ポジションの概要
レフト	エースアタッカーと言われる。チームのキーパーソンとして、攻守両面で中心にならねばならない。
センター	クイックなどの攻撃、相手チームのブロックをかかわすためのおとりにもなる。影の活躍が多いポジションである。スピードと持久力が求められる。
ライト	サイドアタッカーとしてスパイクやブロックをこなす、レシーブに加わり、トスも上げる。どのポジションよりオールラウンドな役割が求められる。
セッター	アタッカーにトスを上げる役割。チームの司令塔として冷静な判断が求められる。特に、アタッカーとのコミュニケーションが必要とされる。
リベロ	アタックを打たないレシーブ専門のポジションである。レシーブ力が要求される。最後部から陣形を微調整。監督・スタッフと選手の橋渡し役でもある。

調査時期：2012年10月に調査表を配布した。

結果

記述統計

Table3に各尺度得点の平均値、標準偏差、95%信頼限界をしめした。研究では、統制群をもうけることができなかつたため、得点の95%信頼限界を標準的データと比較した。エゴグラムは、標準的データとして、標準化データの平均値を示した。本研究における95%信頼限界との比較を行った。自尊感情尺度は、桜井(2000)の結果を示し、その平均値と標準偏差を用いて検定を行った。これらの比較は、調査時期や年齢などの標準化条件が統制されていないため、信頼性の保証は難しく、参考にとどめるべきであるが、参考のため以下に記載した。

エゴグラム：SGEの5つの自我状態の平均得点の95%信頼限界は、標準化データの平均値(鈴木ら, 1997)より高く、バレーボール選手はエゴグラムの自我状態の全てにおいて標準より高いのではないかと考えられた。

自尊感情得点：平均は28.76(95%信頼限界は、27.78-29.96)であった。桜井(2000)の平均値、標

Table3 満足度、エゴグラム、ストレス反応尺度(GHQ12)、自尊感情尺度の平均値と標準的データとの比較

	標準的データ ¹⁾ (女性)		全対象者		95% 信頼限界		比較
	平均	SD	平均	SD	下限	上限	
批判的な親(OP)	14.1	—	15.94	3.01	15.39	16.50	△
養護的な親(NP)	14.6	—	15.76	3.09	15.19	16.33	△
大人(A)	11	—	11.96	3.69	11.28	12.64	△
自由な子ども(FC)	14.3	—	15.69	3.51	15.04	16.34	△
順応した子ども(AC)	11.5	—	13.20	4.21	12.42	13.97	△
満足度	—	—	4.99	2.61	4.51	5.47	—
自尊感情(SE)	27.69	4.83	28.87	5.91	27.78	29.96	△
ストレス反応(GHQ)	—	—	4.45	2.71	3.95	4.95	△*

1) 標準的データとして、エゴグラムは鈴木ら(1997)の標準化データを、自尊感情は桜井(2000)のデータを用いた。

△、標準的データと比較して高い

*、GHQ12は、カットオフポイントが4点であり、平均4.41点は、比較的高値と考えられた

準偏差を用いて、*t*検定を行ったところ、有意な差が見られた($t(357)=2.01, p<.05$)。したがって、桜井の標準的な大学生と比較すると、自尊感情は高いと考えられた。

ストレス反応：GHQ12は、カットオフポイントが4点である。したがって、3点で問題なし、4点で心身が不健康である可能性があると判断するが、問題の有無の真の境界値は3.5点である。本データの95%信頼区間は、3.95-4.95であり、3.5を含まないため、ストレス反応の得点は高値であると考えられた。

各尺度得点のポジション、立場による差

ポジションと立場(レギュラー, リザーブ)による各尺度得点の相違を検討するために、各尺度得点を従属変数とした2要因の分散分析(ポジションと立場を被験者間要因とした)を行った。Table4に、各尺度のポジション別、立場別平均得点と分散分析の結果(ポジション、立場の主効果、それらの交互作用、ならびにポジションの主効果に関するDuncanの法による多重比較の結果)を示した。

エゴグラムのA(大人)は、ポジションの主効果($F(4,98)=2.13, p<.10$)ならびに、ポジションと立場の交互作用に有意な傾向が見られた($F(4,98)=2.11, p<.10$)。ポジションの主効果に関する多重比較($p<.05$)の結果Aは、リベロが最も高く、センターは最も低かったが、その2つのポジションの間にはのみ有意な差が見られた。ポジションと立場の交互作用に有意な傾向が見られたため、単純主効果の検定ならびに多重比較を行った(Figure1)。ポジションの単純主効果はリザーブの選手においてのみ有意であった($F(4,98)=3.30, p<.05$)。多重比較の結果、リベロとセンター、ならびにリベロとライトの間の差が有意であった。立場の単純主効果はライトにおいてのみ有意

Table4 満足度、エゴグラム、ストレス反応尺度(GHQ12)、自尊感情尺度のグループ別平均値と分散分析結果

	ポジション(人数)								立場	分散分析結果						
	全対象者		センター	レフト	ライト	セッター	リベロ	レギュラー		リザーブ	主効果	交互作用				
	平均	SD	(34)	(26)	(11)	(15)	(20)	61	56							
CP	15.94	3.01	15.83	15.88	15.41	15.07	16.55	15.90	15.99							
NP	15.76	3.09	14.83	16.42	15.58	15.87	16.10	15.62	15.91							
エゴグラム A	11.96	3.69	10.74	a	12.04	a,b	11.33	a,b	11.80	a,b	13.50	b	11.85	12.07	**	+
FC	15.69	3.51	15.74	b,c	16.38	b,c	15.00	a,b	17.47	c	13.40	a	15.75	15.62	**	
AC	13.20	4.21	13.06		12.94	12.83	13.07	13.25	13.04	13.36						
満足度	4.99	2.61	4.91	a,b	5.42	b	4.82	a,b	3.4	a	6.05	b	5.92	3.98	**	**
自尊感情(SE)	28.87	5.91	28.45	29.91	29.65	28.23	25.25	28.80	28.71							
ストレス反応(GHQ)	4.45	2.71	4.40	4.27	3.67	4.80	5.65	4.59	4.31							

+, $p<.10$; **, $p<.01$

a,b,c, ポジションの主効果に関する多重比較の結果であり、それぞれが等質サブグループを示す。

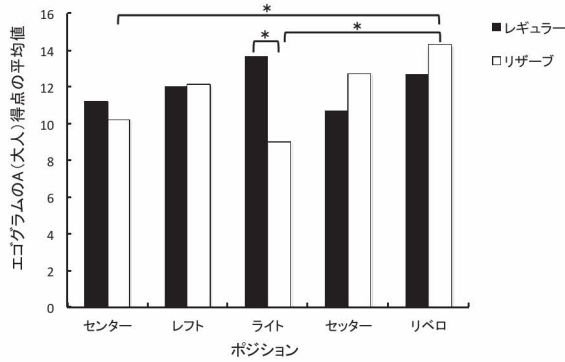


Figure1 ポジション別, 立場(レギュラー, 控え)別に集計したエゴグラムのA(大人)得点。*, $p < .05$

であった ($F(1,98)=5.47, p < .05$)。

エゴグラムのFC(自由な子ども)は, ポジションの主効果のみが有意であった ($F(4,98)=3.91, p < .01$)。多重比較 ($p < .05$)の結果, セッターのFCが最も高く, リベロならびにライトと有意な差が見られた。リベロは, FCがもっとも低く, セッター, レフト, センターと有意な差が見られた。

満足度は, ポジションの主効果 ($F(4,98)=2.67, p < .05$), 立場の主効果 ($F(1,98)=12.70, p < .01$) ともに有意であった。ポジションと立場の交互作用は有意ではなかった。多重比較 ($p < .05$)の結果, 満足度は, リベロが最も高く, その次がレフトであった。この2つは, 最も低いセッターと有意な差が見られた。また, 立場の主効果は満足度においてのみみられた。レギュラー選手の立場に関する満足度は, リザーブ選手と比較して高いといえる。

性格と, 満足度, 自尊感情, ストレス反応の関係について

年齢, 立場, エゴグラムによる性格特徴, 現在の立場への満足度, 自尊感情, ならびにストレス反応 (GHQ12得点) の関係性を検討するために, 3種の重回帰分析を行った。1) GHQ12得点を目標変数とし, その他を説明変数とした分析, 2) 自尊感情得点を目標変数とし, GHQ12得点以外の変数を説明変数とした分析, ならびに 3) 満足度を目標変数とし, GHQ12得点以外の変数を説明変数とした分析を行った。これらの分析の結果をパス図として示した (Figure2)。さらに, これらの分析をレギュラー選手のみと, リザーブ選手のみで行った結果も示した (Figure3)。図には有意確率5%以下の β 係数を示した。

ストレス反応への影響:レギュラー選手の場合, 満

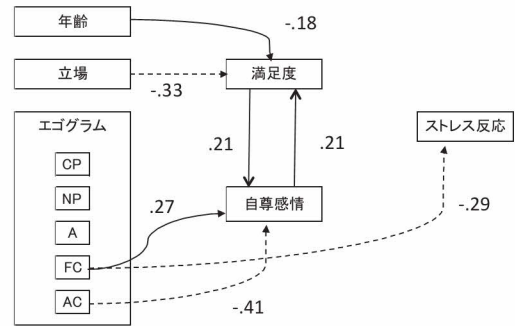


Figure2 重回帰分析によるパス図(全対象者)

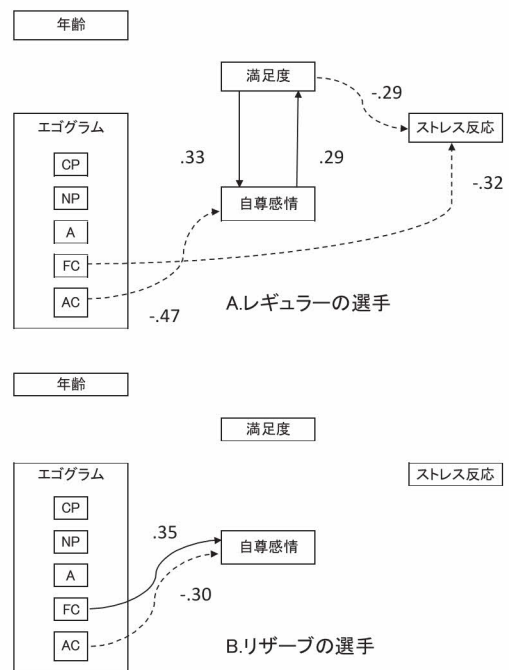


Figure3 重回帰分析によるパス図(立場別)

足度 ($\beta = -.29$)とエゴグラムのFC ($\beta = -.32$)が, ストレス反応に負の関係性を示した。他方, リザーブの選手の場合, ストレス反応に影響する変数は見いだせなかった。

自尊感情への影響:選手全体 ($\beta = -.41$), レギュラー ($\beta = -.47$), リザーブ ($\beta = -.30$)とも共通して, ACが自尊感情を低める方向に働き, 自尊感情はストレス反応に影響を示さないという点であった。レギュラー選手では, 自尊感情と満足度が相互に強く影響し合っている ($\beta = .33; \beta = .29$)が, リザーブ選手ではそのようなことはなかった。また, リザーブ選手では, FCは自尊感情を高める方向に働いていた ($\beta = .35$)。

満足度への影響:レギュラー選手では, 満足度は自尊感情 ($\beta = .33$)やストレス反応 ($\beta = -.29$)と関連性があったが, リザーブの選手の場合, 満足度は他の尺度と全く関係がなかった。

考察

女子バレーボール選手の性格特徴について

自尊感情は、一般学生との差がみられなかったが、その他の尺度は、標準的なデータよりも高い傾向がみられた。しかしながら、本研究では適切な統制群を設けることができなかつたため、これらの傾向は、現代の女子高校生、大学生に共通の特徴であるかもしれない。そこで、今後、適切な統制群を設けた上での研究が望まれる。

エゴグラム:エゴグラムにおいては、全体的な点数の高さは、個々の尺度の特徴の強さを意味するよりも、全般的な精神的エネルギーの高さを示すことがある。バレーボール選手として活動することが、精神的なエネルギーレベルを高めているとも解釈できる。

ストレス反応:ストレス、不安、抑うつ等の尺度を行った場合、大学生は一般的に高得点を示すことが多く、本研究結果もその影響を受けているとも言える。しかしながら、比較的競技レベルの高い選手が多く、厳しい競争環境を反映してストレス反応が高くなったとも考えられる。

ポジション別、立場別の心理特性について

ポジション別のエゴグラム得点に関する分析結果は次のようにまとめることができる。

1) **センター:**Aで示されるような客観性は最も低い。FCに示される自由な表現や満足度は、中間的であった。平均的なプロフィールとしては、平坦なタイプであり大きな特徴はないと言える。

2) **レフト:**客観性(Aによって示される)や自由な表現(FCによって示される)は比較的高いといえる。満足度も高いといえる。比較的自分の思うようにふるまっていると言えるのだが、冷静に物事を判断している面もある。

3) **ライト:**レフトに準ずる。レフトとライトは、ともにアタッカーとして類似した特徴を持つと言える。しかしながら、Aの得点は、レギュラーの方がリザーブより有意に高く、レギュラーはかなり冷静で合理的な考え方、行動の仕方をしていると言えよう。

4) **セッター:**客観性(Aによる)は中間的であるが、自由な表現(FCによる)は最も高い。満足度は最も低い。セッターも比較的自分の思うように動いていると言える。チームの司令塔が、このように自由に動けるのが競技レベルをあげるのか、どうかは、本研究結果から判断することできない。今後の課題とも言える。

5) **リベロ:**客観性(Aによる)は最も高いが、自由な表現(FCによる)はもっとも低い。満足度は最も高い。

チームの動き全体を把握しているポジションであり、Aが高いことは理解できる。ACは他と比べ高くはないが、FCが低いことで、自己を抑え、他(ポジション)を優先しているとも考えられる。

以上、各ポジションの特徴がエゴグラム上に現れたと言える。しかしながら、エゴグラムは、プロフィール分析によって、より詳細で適切な解釈ができると言える。今後、プロフィールを用いたより詳細な分析が望まれる。

立場の効果:立場の効果は、満足度においてのみ現れた。レギュラー選手の満足度の方が高いことは、当然のこととも言える。他の尺度で立場差が出てこなかったことは、競技レベルと性格や自尊感情に関連性がないことを示すが、エゴグラムのAのような交互作用が関与している可能性はある。今後、このような交互作用の詳細な検討が望まれる。

性格と、満足度、自尊感情、ストレス反応の関係

ストレス反応、自尊感情、あるいは満足度を目的変数とした重回帰分析を行い、性格や立場などの関係を調べた。レギュラー選手とリザーブ選手で、それらの関係性が異なっていた。

ストレス反応への影響:レギュラー選手では、満足度とエゴグラムのFCが、ストレス反応を抑制する方向で働いた。FCが高く、自分の立場に満足している選手はストレス反応が低かったと考えられた。

自尊感情への影響:選手全体に共通している傾向は、ACが自尊感情を低める方向に働き、自尊感情はストレス反応に影響を示さないという点であった。レギュラー選手では、自尊感情と満足度が相互に強く影響し合っているが、リザーブ選手ではそのようなことはなかった。また、レギュラー選手では、FCは自尊感情とは関係せず、ストレス反応と関係があったが、リザーブ選手では、FCは自尊感情を高める方向に働いていた。

満足度への影響:レギュラー選手では、満足度は自尊感情やストレス反応と関連性があったが、リザーブの選手の場合、満足度は他の尺度と全く関係がなかった。

FCやACの高さが自尊感情やストレス反応に影響することは、一般の学生や人々にもあてはまる。しかし、バレーボールにおける立場への満足がストレス反応を弱める(もしくは緩和する)ことや、自尊感情と相互に影響し合うことは、誰にでもあてはまることではない。彼女らがバレーボールでの成績や達成を重要な出来事と位置づけているからではないだろうか。つま

り、レギュラー選手は、バレーボールに深く(自我)関与していると考えられる。他方、リザーブの選手は、それほどバレーボールに関与していないと考えられる。これらの結果は、遠藤・朽堀・豊田・福原・都沢・上田(1985)の研究におけるバレーボールの“正選手の方が意欲(やる気)があり、勝利を志向し”という結果と一致していると言えよう。このようなレギュラー選手の競技への深い関与は、競技へのエンゲージメントとしてポジティブにとらえることができるのか、あるいは、競争へのとらわれとしてとらえた方がよいのか、これらの点については、今後の検討を待たねばならないであろう。また、リザーブ選手の低い関与は、意欲やエンゲージメントの低さととらえるのか、柔軟性や多様な価値観を持つととらえるのかといった疑問についても、今後の研究が期待できる。

¹ 本研究は、第1著者の指導のもとに、第2著者が2012年度に、帝塚山大学心理福祉学部にて提出した卒業論文を再分析したものである。また、本研究は日本健康心理学会第26回大会において報告された。

文献

- 阿江美恵子(2008). 集団の中の個人(1)パーソナリティ 日本スポーツ心理学会(編)スポーツ心理学事典, 大修館書店.
- 芦原陸・桂戴作(1992). 自分がわかる心理テスト—知らない自分が見えてくる, 講談社.
- 遠藤俊郎(1997). 実践プログラム:バレーボール 猪俣公宏(編)選手とコーチのためのメンタルマネジメント・マニュアル, 大修館書店.
- 遠藤俊郎・朽堀申二・豊田博・福原祐三・都沢凡夫・上田実(1985). バレーボール選手の心理的適正に関する研究:性格特性,競技意欲,競争不安に着目して 日本体育学会大会号, **36**, 590.
- 本田純久・柴田義貞・中根允文(2001). GHQ-12項目質問紙を用いた精神医学的障害のスクリーニング 厚生指針, **48**, 5-10.
- 磯貝浩久(2008). 協議の心理的適性(5)パーソナリティ 日本スポーツ心理学会(編)スポーツ心理学事典, 大修館書店.
- Jarvis, M. (1999). *Sport Psychology*, New York: Routledge. (ジャービス, M. 工藤和俊・平田智秋(訳)(2006). スポーツ心理学入門 新曜社)
- LeUnes, A. & Nation, J.R. (2002). *Sport Psychology: an introduction 3rd edition*, Pacific Grove: Wadsworth.
- 丸山貴也・遠藤俊郎・朽堀申二・福原祐三・都沢凡夫・上田実・吉田敏明・池上寿伸(1986). バレーボール選手の心理的適性に関する研究(6):大学生女子選手について 日本体育学会大会号, **37**, 279.
- 松田岩男(1981). スポーツ選手の心理的適性に関する研究 第1報, 第2報 日本体育協会スポーツ科学研究報告.
- 中川泰彬・大坊郁夫(1985). 日本版 GHQ 精神健康調査票手引き, 日本文化科学社.
- 中込四郎・伊藤豊彦・山本裕二(2007). スポーツ心理学—からだ・運動と心の接点, 培風館.
- 新納美々(2001). 企業労働者への調査に基づいた日本版GHQ精神健康度調査票12項目版(GHQ-12)の信頼性と妥当性の検討 精神医学 **43**, 431-436.
- 西村栄蔵・田中啓之(1986). バレーボール選手のポジション別の心理的適正に関する研究 広島経済大学研究論集, **9**, 101-112.
- 西村栄蔵・田中啓之(1987). 競技レベルの高いチームと低いチームのバレーボール選手の心理的適正に関する研究 広島経済大学研究論集 **10**, 75-85.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and adolescent self-image*. New Jersey: Princeton University Press
- 桜井茂夫(2000). ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討 筑波大学発達臨床心理学研究, **12**, 65-71.
- 篠村朋樹・遠藤俊郎(1989). 高専生バレーボール選手の心理適性に関する研究 木更津工業高等専門学校紀要, **22**, 127-134.
- 鈴木理俊・佐田彰見・小川正子・出雲路千恵・太田有美・堤三希子・芦原陸・桂戴作(1997). 自己成長エゴグラム(SGE)の研究 心身医療, **9**, 80-87.
- 杉原隆(1988). スポーツに対する興味とパーソナリティ 末利博・高野健次・柏原健三(編)応用心理学講座8 スポーツの心理学, 福村出版.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子(1982). 認知された自己の諸側面 教育心理学研究, **30**, 64-68.
- 吉川正博(2013). 試合に勝つためのバレーボールフォーメーションBOOK, 日東書院.

Relationship between Personality Trait and Mental Health in Female Volleyball Players : Egogram and Fielding Positions

Junichiro OOKUBO and Kimiko NAGANO

Abstracts

Objective: The present study investigated the relationship between personality traits, mental health, playing position and performance levels in female volleyball players.

Method: One hundred and nineteen female volleyball players had completed Self Grow-up Egogram (SGE), Self-esteem scale (SE scale), and General Health Questionnaire 12 items version (GHQ12). And they were asked their satisfaction level as volleyball player.

Results: Mean scores of subscales (ego state) of SGE were compared with the means of standardization group. Mean score of SE scale was compared with the general college population which had reported by Sakurai(2000). These comparisons revealed that female volleyball players were higher on all ego states and self esteem than general samples. Two-way analysis of variance showed that A and FC subscales and satisfaction level were differed by playing position. It was revealed that (1)center players were characterized by low A, intermediate FC, and intermediate satisfaction, (2) left players were characterized by intermediate A, intermediate FC, and high satisfaction, (3) right players were characterized by intermediate A, FC, and satisfaction, (4) setter players were characterized by intermediate A, high FC, and low satisfaction, and (5) libero players were characterized by high A, low FC, and high satisfaction. These results were compared with positional demands. Egograms of libero players were consisted with their positional demands. Multiple regression analyses revealed that satisfaction levels and FC were negatively related to stress responses on regular players. On reserve players there were no relationship between stress responses and the other variables. Although AC was negatively related to self-esteem in regular and reserve players, FC was positively related to self-esteem only in reserve players.

Conclusion: Personality traits of Female volleyball players were differed by playing positions. Personality traits were consistent with positional demands on libero players. On the other positions, relationships between playing positions and positional demands were ambiguous. On regular players, FC seemed to buffer stress responses. On reserve players, FC seemed to increase self-esteem. On all players, AC seemed to inhibit self-esteem.

Key words: Stress, coping, social support